

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00773

研究課題名(和文)4技能タスクを活用した高校、大学における英語授業の質的向上のための研究

研究課題名(英文) Research to improve the quality of English language teaching in high schools and universities using 4-skills tasks.

研究代表者

鈴木 夏代 (Suzuki, Natsuyo)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：50836319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1)全国中等・高等教育における実態調査、2)指導法の有効性、効果、課題を現場目線から論点整理、3)4技能タスクの実践応用、を目指した。コロナ禍により2)についての現地調査が中断したが、代わりに大学の語学授業(オンライン)で外国人教員が行う4技能タスクの活用について調査し、英米圏の大学が提供するMassive Open Online Courseを活用したタスク中心の反転授業を策定しその分析を行った。研究会と海外研究者の講演とワークショップを開催し、現場教員らと意見交換を重ね、1)教員の理解、認識についての周知、2)大学の語学授業の改善について、さらなる課題が浮き彫りになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、1)本研究課題について、国際会議の場で研究発表を行った。2)全国の英語教育関係者に呼びかけ、研究会を通して広く意見を集約した。3)海外の専門家を招聘した講演とワークショップ、討論会を開催した。

社会的意義としては、1)国際学会や研究会を通して得た知見を現場の教員と共有し、理解と周知、応用に資すること、2)国際シンポジウムでの講演とワークショップへの参加機会を提供し、普段忙しい教員が自国で海外研究者と共に学び、授業実践に活かせる機会を提供できた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to 1) survey English teaching classrooms in secondary and tertiary education in Japan, 2) summarise the issues from the field regarding the effectiveness of teaching methods and challenges, and 3) apply the 4-skills task. The field research on 2) was interrupted due to Covid-19, but instead, we (1) investigated the use of 4-skills tasks by foreign teachers in university (online) language classes, and (2) formulated and analysed a task-oriented flipped classroom using the Massive Open Online Course offered by overseas universities. Research meetings and workshops with lectures by foreign researchers were held, and opinions were exchanged with teachers and others, highlighting further issues regarding 1) teachers' understanding and awareness and 2) improvement of university English classes.

研究分野：英語教育 応用言語学 第二言語習得

キーワード：タスク TBLT 4技能活用 英語授業

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

1)外国語（英語）教育においては、文法訳読中心からコミュニケーション重視の授業へと指針が転換し「コミュニケーション重視」という言葉が学習指導要領でも明記されてから久しい。しかし、現場の教員がそれをどう捉え授業実践を行っているのか、統一的な見解が徹底されているわけではない。各学校現場での課題や実践例を調べるために、授業見学、観察はもとより、実証研究をもとに現況分析を行い、広く意見集約を行う必要性があった。

2)理論研究から実践への応用を目指すため、ボトムアップ的に共通認識を構築するため、国内での研究会、フォーラムの開催とともに、ひいては国際シンポジウムを開催することで、グローバル化に対応した我が国の英語教育の質的向上を見据えた研究が必要であった。

2. 研究の目的

4 技能タスクについての理解、応用言語学（第二言語習得）の知見を我が国の高等学校、大学で英語を担当する教員と広く共有し、各現場での意見集約と論点整理を行い、状況の把握を試み、グローバル社会での我が国の英語教育のあり方を検証し、英語授業の質的向上につなげる。

3. 研究の方法

- 1) タスク研究会を立ち上げ、都立高校英語科主任と、地方の国立高等専門学校の英語科教員らとともに9回ほどミーティングを重ね、4技能タスクへの共通理解、現場での課題等について討論を重ねる。
- 2) 全国で英語教育に力を入れている高等学校（英語ディベート大会出場校（2019年））を対象（164校）に、アンケート調査を行った。調査内容では、普段の英語授業における4技能活用のタスク（言語活動）について、1)頻度 2)形態 3)内容 4)教員のフィードバック 5)教員からみた学習者の参加度 6)授業を通じた4技能の割合 7)当該校の英語力の目標、等について調査。
- 3) 1)の研究会と2)のアンケート結果を踏まえ「4技能タスクを活用した授業実践のためのフォーラム」を開催し、参加希望した中等教育の英語科教員らと大学教員から対面で意見交換と課題発見を行う。
- 4) アンケート協力校の中から授業実践について視察を承諾してくれた学校へ訪問し（大阪、福岡、埼玉、等17校）、実践例や教員との意見交換を予定していたが、コロナ禍により全面中止。
- 5) コロナ禍においては、大学においてオンライン授業が始まり、外国人教員による英語授業の観察（オンライン zoom 授業への参加）を行う。4技能を活用したタスクがどのように運用されているか、タスクのタイプや学習者のタスク中の会話データを収集。
- 6) 留学が必修単位となる大学の国際英語専攻科において、コロナ禍での留学代替プログラムを策定し、授業効果についてデータを収集。英米圏の双方向活動を意識した講義授業（MOOCs：Massive Open Online Courses）を反転授業として活用した学修効果について、通常の語学授業の事後アンケートと比較分析し、コロナ後の英語授業運営の interactive, autonomous, authentic 授業の実現、また ICT や AI の活用の加速に伴う英語授業の変化について調査。

- 7) コロナ禍による外出禁止が明けた後、海外の研究者を招致したシンポジウム「Aiming for effective tasks in the English classroom: 英語授業での効果的なタスクをめざして」を開催。日本の英語（日本語）教員や言語教育関係者を対象に、教師の視点と学習者視点の双方から、4 技能活用タスクにもとづく授業に関する研究講演とパネル討論を開催。世界の英語教育の潮流を踏まえ、日本の英語（言語）教育の質的向上に向け、広く教員の理解を深め、互いの認識を共有。
- 8) 日本の中等教育の英語教員を目指す教職課程（英語科教育法）を通して、学習指導要領のコア・カリキュラムへの理解と応用実践について、教職課程履修者による授業実践案の可能性について検証。

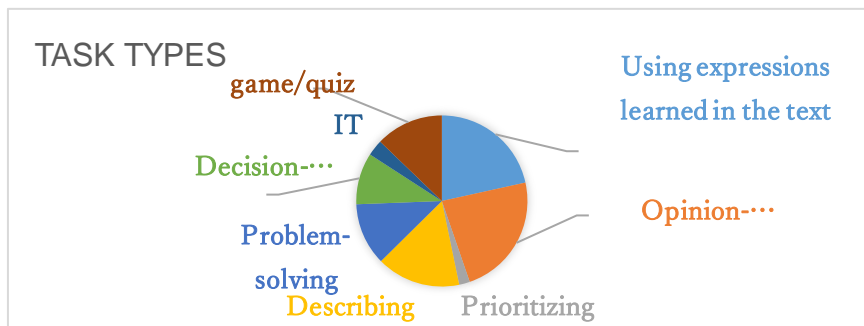
4 技能タスクを活用した英語授業の質的向上のための研究		
研究調査		学会発表、研究会、シンポジウム
研究 1	高等学校アンケート調査分析 (高等学校実地調査=コロナ禍のため中止)	研究会開催「4 技能タスクを活用する授業実践フォーラムー教育指導理論と授業実践の融合に向けてー」と発表
研究 2	コロナ禍の大学オンライン語学授業調査分析	研究会発表（引用文献②と③） 国際学会発表
研究 3	留学代替プログラム調査分析	
研究 4	教職課程の大学生における授業実践案の可能性について調査分析	シンポジウム開催「Aiming for effective tasks in the English classroom: 英語授業での効果的なタスクをめざして」

表 1.研究課題のための調査と研究

4. 研究成果

1)高等学校英語科主任教員宛(全国から抽出された 164 校)へのアンケート調査結果から 60 校から回答を得た(回収率は 38%)。アンケート結果から、言語活動を積極的に取り入れている(85.4%)と回答した学校が多かったが、50 分授業のうち、言語活動に割く時間は平均で約 9 分であった。形態としては、約 32%がペアワークが行なっており、中には、TOEIC 試験のためのモノローグ発話練習、音読、ポスター発表などが挙げられた。タスクの内容について、リストアップしてもらった設問については(図 1)、テキストの表現を使ったアウトプット活動(23.1%)が最も多く、つづいて意見交換活動(21.5%)とあったが、授業時間の最初の数分を使用したペアワークが多いことから Opinion Exchange タスクは Think-Pair-Share 活動として認識されていることが推察された。その他のタスクには、エッセイライティング、ディベート、描写、聞いたり読んだ内容を英語で再現する活動が挙げられた。話すタスク(言語活動)における教員のフィードバックについては、文法の説明後に行うとした回答が 27%、活動の後 focus-on-form を行っているとした回答は 14.5%だった。しかし、多くが話すタスク中に accuracy(正誤)に関するフィードバックを与えている(82%)とのことだった。当該校の目標設定に関しては、「身近なことに話したり書いたりする力」「人前で自分の意見を伝えられるレベル」「記事などを要約し、それについて意見を述べる力」「英検準 2 級～準 1 級、CEFR B1 レベル」が挙げられた。一方で「残念ながら教科書の内容や各課の文法事項などで一杯いっぱいなところが多い」「集団として CEFR A2 レベル」「英語力と言うよりも英語を通して世界を見ようとする意欲を身につけてほしい」「自発的にコミュニケーションを図ろうとする積極性」といったことが挙げられた。また自由記述では、「黒板と CD デッキというスタイルではなく、ホワイトボード、プロジェクター、音響設備などがなく理想と現実のギャップが大きすぎる」といった、英語教育環境の ICT 化を望む声もあった。

図1. 教室内のタスクタイプに関する回答



2) 「4技能タスクを活用する授業実践フォーラムー教育指導理論と授業実践の融合に向けて」と題するフォーラムでは、『21世紀の英語教育指導の方向性と課題』（原田哲男）を基調講演に、『外国語学習における4技能タスクの役割』（鈴木夏代）、『タスクの段階的提示ー西高でのCLILでの実践』（福田恭久）、『オランダのバイリンガル教育から学ぶCLILの実践』（関佳奈）と題する発表を行った。新潟、山口、長野を含めた地域から35名の参加者（半数が初等・中等教育の現職教員）が集い、現況の課題と向上について、パネル討論と全体討論を行い、それぞれの現況の課題や質的向上に向けた可能性について話し合った。

3) コロナ禍で学校訪問が中止になり、代わりに大学の語学授業において、4技能タスクがどのように活用されているかを知るために授業観察（ZOOM）を行った。2年次後期からの留学が中止となった学生が履修する語学授業3クラス（1クラス20名弱）を対象に、ZOOMのブレイクアウトルームでの学生のグループワーク会話を録音したデータを収集した。海外大学の授業についてゆくために必要な4技能を網羅するための準備テキストを使用した。しかし、タスクを活用した授業というよりは、講師がテキスト「を」教えることに終始しがちで、テキスト上のリスニングやスピーキングに関する理解度を試す「問題」を進める授業であったのが印象的であった。また教員がいないブレイクアウトルームで、学生たちは日本語で会話する時間が多かった。

4) 一方で、留学が中止になった学生のための代替プログラムとして、海外留学に近い疑似体験を提供すべく、英米圏の大学が提供するMassive Open Online Coursesを活用した授業プログラムを実施することになった。セルフスタディーのためコースは、英語による講義授業をオンラインビデオで視聴し、文献を読む、調べる、Discussionコーナーで他の参加者とチャット方式で意見交換を行う、といったタスクで構成された双方向学修の場である。トピックは担当する専攻の教員の専門領域から選び、オンライン・プラットフォームを活用した反転授業形態で行われた。この研究成果については、国際学会と研究会で発表した（引用文献②と③）。

5) これらの調査や研究会での意見交換から、4技能タスクを活用した英語授業の質的向上のためには、教員がタスク（言語活動）を理解し、果たすべき役割を認識することが重要であることが明らかになった。テキスト「を」教える英語授業は、英語教員でなくてもできるかもしれない。しかし、学修者が英語を使って内容を学び、内容に関する向学意欲を掻き立てられ、付随的に英語力の向上につながる英語授業のあり方も可能であることが、実証研究から示唆を得た。同時に、学習指導要領の影響を受ける高等学校の目標と大学の語学授業とのギャップが浮き彫りになっ

た。高等学校の英語科教員宛のアンケートの自由記述には「高校で 4 技能活動してきているので、大学の授業がつまらないレベルが低いという学生が本当に増えている。」という声が挙げられた。第二言語習得研究の発展に伴い、理論と実践をつなぐ応用研究が、一層求められている。

6) 研究の最終年は『英語授業での効果的なタスクをめざして』と題し、海外研究者を招聘した英語による講演とワークショップを体験する国際シンポジウムを開催。60 名弱の参加登録者のうち、初等・中等教育の教員は 10 名程度の参加であったが、参加者から事後アンケートで次のような意見が寄せられた。「実践に向けて大切なことが学べて、とても良かった」「Keynote speech と panel discussion から刺激を受け、自分の授業への気づきをいただきました」「It was all fantastic and really riveting. I hope to attend more in the future」「タスクだけではなく、学習者の心理に注目するという点は新しい視点でした。またワークショップもあったので、いろいろな視点からタスクについて話をするので、タスクに対する理解が深まりました」「タスクの定義が確認できたこと。あまり難しく考えなくていいことがわかったこと」「良かった。TBSL について深く理解できた」「自分の授業についていい内省ができた」「I only attended the workshop held on day 2, but it was really thought-provoking as I could try how the theories can be put into practice during the workshop. I also appreciate the opportunity that we could think about the lesson plans, which is really helpful to connect theories with pedagogies.」「As a takeaway, the workshops reminded of how difficult it is implement TBLT in Japanese school settings even with scaffolding especially with abstract concepts such as team collaboration, group dynamics, leadership, goal-setting and meta-cognition. However, since Japanese EFL education has been undergoing drastic changes over the past years, there is more impetus for practitioners to continue to give TBLT a try!」これらの意見を鑑みると、英語授業における効果的なタスクの活用への現場での認知がまだ十分ではなかったことが伺え、応用に関する知の共有がさらに必要であることがわかった。特に、大学教育における 4 技能活用の効果的な授業については、大学の独自性を見極め新たな視点から捉え直す課題があることが明らかになった。

7) 最後に、将来教員を目指す教職課程を履修する大学生を対象にした英語科教育法の授業で 4 技能タスクを活用した指導案作りの可能性について論考としてまとめた。(引用文献①)

本研究成果から今後の研究への示唆として、英語授業の質的向上のためには、1)教員の理論と実践への認識と応用のための理解と果たすべき役割、2)ICT 活用の授業環境促進の観点から、さらに調査と実証研究を重ねてゆく必要があるとの考えに至った。

<引用文献>

- ①鈴木夏代、教員養成外国語（英語）コア・カリキュラム」の導入による新たな可能性—英語科教育法授業における言語活動（タスク）の活用—、東京女子大学 教職・学芸員課程研究 第 4 号、2024、37-50
- ②鈴木夏代、大規模公開オンライン講座（MOOCs）を活用した双方向授業 —留学代替プログラムからの試み—、大学教育と情報 182(1)2023. 12-13
- ③ 大規模公開オンライン講座（MOOCs）を活用した留学代替プログラム、ICT利用による教育改善研究発表会資料集 2022、146-149

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鈴木夏代	4. 巻 第4号
2. 論文標題 「教員養成外国語（英語）コア・カリキュラム」の導入による新たな可能性－英語科教育法授業における言語活動（タスク）の活用－	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京女子大学 教職・学芸員課程研究	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木夏代	4. 巻 182(1)
2. 論文標題 大規模公開オンライン講座（MOOCs）を活用した双方向授業 留学代替プログラムからの試み－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育と情報	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木夏代	4. 巻 73(2)
2. 論文標題 思考タスクにおける母語使用の影響	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京女子大学紀要「論集」	6. 最初と最後の頁 135-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木夏代	4. 巻 1
2. 論文標題 大規模公開オンライン講座（MOOCs）を活用した留学代替プログラム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年度 ICT利用による教育改善研究発表会資料集 146-149 2022年8月25日	6. 最初と最後の頁 146-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 Challenges of EFL Teacher Training Courses in Japan for New Teaching Approaches
3. 学会等名 The 25th International Conference and Workshop on TEFL & Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 Beyond classrooms: How successfully could online MOOC platforms be integrated into an alternative study abroad program during the pandemic? (In the symposium: Digital tools to enhance L2 interactions in the language classroom.)
3. 学会等名 The 56 British Association for Applied Linguistics (英国応用言語学会) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 What support do language learners in Asian classrooms need with TBLT?
3. 学会等名 The 10th International Association for Task-Based Language Teaching (国際タスク言語教育学会) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 What support do language learners in Asian classrooms need with TBLT?
3. 学会等名 International Association for Task-Based Language Teaching (国際タスク言語教育学会) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 Effects of Task Designs on L2 Learners' Discourse Performance
3. 学会等名 British Association for Applied Linguistics (英国応用言語学会) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 Does learners' shared L1 use in higher order thinking tasks hinder L2 development?
3. 学会等名 The World Congress of Applied Linguistics (世界応用言語学会) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 Does Learners' Shared L1 Use Hinder L2 Speaking Performance?
3. 学会等名 British Association for Applied Linguistics (英国応用言語学会) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 How Learners' Shared L1 Use Functions in L2 Speaking Tasks
3. 学会等名 International Conference on Task-based language teaching(国際タスク言語教育学会) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Natsuyo Suzuki
2. 発表標題 Does learners' shared L1 use for a task completion hinder L2 development?
3. 学会等名 Innovation in Language Learning International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	原田 哲男 (Harada Tetsuo) (60208676)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Aiming fo effective tasks in the English classroom (英語授業での効果的なタスクをめざして)	開催年 2023年～2023年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------